生涯学習者としての日本語ボランティアが地域の大学に期待するもの

―松江地域事情に密着した日本語地域教材冊子の開発―

山本　達之*・松田みゆき**
（*島根大学生物資源科学部，**東京外国語大学留学生日本語教育センター）

What is expected for a local university from Japanese teaching volunteers?
―The development of teaching materials specialized in Matsue region―

Tatsuyuki YAMAMOTO, Miyuki MATSUDA

Abstract

What expected for a local university in the filed of Japanese language support has been classified in terms of the social support network into four classifications, materials, mentality, guidance and information. Our analysis revealed that Japanese teaching volunteers wish to be given all of the four classifications by a local university, especially when they develop their own teaching materials. Development of our original teaching materials specialized in Matsue region will be introduced hereafter.

Ⅰ　はじめに

筆者らは，本学松江キャンパスの位置する松江地域において，大学教員および日本語ボランティア養成講座講師の立場から，ボランティア（以下，V）による地域日本語学習支援に関わりを持って活動してきた。近年急増しつつある松江地域の在住外国人への地域行政による取り組みや，本学の留学生の受け入れなどによる積極的な国際交流プログラムは，地域住民による草の根の国際交流を盛んにし，国際交流活動は広く地域に受け入れられている。こうした中で，在住外国人の日本語学習支援活動を行う日本語Ｖの果たす役割は益々重要になってきている。一方，こうした日本語Ｖが地域の大学に期待する支援や，連携を図ってゆくためには，生涯学習者としての日本語Ｖの活動に目を向けて，公開講座・地域教材開発サポートなどを通した交流活動を欠かすことはできない。本研究では，特にソーシャル・サポート・ネットワーク（以下，SSN）の観点から，大学教員が果たすべき役割について実践的な立場で考察を行う。さらに，筆者らが現在開発中の，松江地域事情に密着した日本語教材『松江地域事情小冊子（仮題）』を紹介する。

Ⅱ　松江地域の外国人と日本語ボランティアグループ

1　研究の背景

松江市，出雲市および隣接する市町村には，島根県に居住する外国人総数約6,000人のうち，現在約５割が居住している[1)]。島根県内に居住する外国人への積極的取り組みとして，島根県で

は，すでに昭和62年には島根県総務部総務課に学事国際交流係が設けられ，平成元年に韓国慶尚北道と姉妹提携を行った。さらに，平成12年には，島根県は大規模な在住外国人対象の実態調査を実施するなどの対応を行ってきた[2)]。その後も国際化事業や在住外国人共生事業への取り組みが積極的に行なわれている。それら事業の中には地域住民の方々の協力が不可欠な事業も多く，中でも直接在住外国人に接する日本語Ｖの方々の活動が果たす役割に対する期待は非常に大きい。こうした国際交流活動を振興する目的で，県レベルでは（財）しまね国際センターが，市レベルでは（財）松江市国際交流協会が設立され，積極的に活動を行う他，様々な民間団体が各々の活動を「国際文化観光都市」松江市を中心とする地域で展開している。

一方，本学では，国際交流の取り組みとして，学生及び教員の教育及び学術文化の交流を推進するため，平成18年５月現在，海外の37の大学等機関と姉妹協定や大学間交流協定を締結している。在籍する外国人留学生は150人である[3)]。協定校の学生が互いに行き来する等の交流プログラム等も実施されている。これらの国際交流プログラムは，ホストファミリーによる受け入れなどをはじめ，松江地域全体からの学外支援なしには円滑に実現し得ない。平成17年度には，国際交流活動を扱った島根大学公開講座「松江地域における国際交流の現状と未来」（全７回）が，筆者らを中心として実施され，松江地域の日本語Ｖを中心とした市民が積極的に参加する機会の提供も行われた[4)]。また，平成18年４月には，国際交流センターも開設され，今後も益々の国際交流の促進が期待されている。

以上のように，松江地域の国際交流への取り組みは，在住外国人の増加に伴い松江地域全体に根付きつつあると言える。

２　松江地域の日本語ボランティアグループ

次に，松江地域で日本語学習支援活動に取り組んでいる日本語Ｖグループについて紹介する。平成18年11月現在，松江地域では，いわゆる「だんだん」,「かけはし」,「いろは」,「しまね多文化共生ネットワーク」の４つのグループが，外国人を対象としたＶ日本語教室を開講している（表１）これらのＶ日本語教室に参加している外国人は国籍，来日目的，年齢など多様であるが，大学を有する地域のＶ日本語教室であるため，本学の留学生の姿が数多く見受けられる。

平成13年には，受講者の約７割が何らかの形で島根大学の関係者であった。この結果を踏まえて，松田は，日本語学習支援グループと島根大学との連携が不可欠であるという提言を行った[5)]。

表１．松江地域において日本語学習支援活動を実施している主なグループ

正式名称	設立年月	主な活動場所 （教室の場所）	Ｖ日本語教室の実施状況 曜日，時間	登録会員数 （人）
日本語ボランティアグループ“だんだん”	平成６年10月	しまね国際センター	水，金，土 １回90分	20
松江日本語指導ボランティア　かけはし	平成７年８月	松江市国際交流会館	水，木，土 １回90分	101
日本語ボランティアいろはの会	平成11年９月	島根大学国際交流会館 しまね国際センター	月～土 １回90分	13
しまね多文化共生ネットワーク	平成14年８月	湘北台ふれあい交流館	月 １回120分	80 （含：Ｖ日本語教室以外での活動者）

その後も多くの本学の留学生がＶ日本語教室に受講者として参加しているが，「近年受講者の割合が変化して来ているのでは」という日本語Ｖの方からの声が今年度初頭に聞かれるようになった。以下，受講者の変化の追跡調査をした結果を（財）松江市国際交流協会主催のＶ日本語教室「かけはし」受講者を例にとって紹介する。まず，受講者の身分を来日目的から，「仕事」,「勉学」,「結婚」，の３つに大きく分類してみた。ALT や企業研修などの仕事関係で来日した受講者を「仕事」に分類し，本学の留学生などに代表される教育研究関連の目的で来日した受講者とその家族を「勉学」に，日本人と結婚するために来日し，特定の職に付いていない人を「結婚」に分類した。また，分類困難なものは「その他」とした。この分類に基づいて過去７年の身分別割合の推移を追跡した結果（図１）,「勉学」と「仕事」のＶ日本語教室受講者全体に占める割合はやや減少傾向にあること，反対に日本人と結婚した外国人配偶者の割合が増加しているという傾向が明らかになった[6)]。平成18年度は上半期のデータのみであるが，「仕事」で来日した受講者が２名（5.0%）,「勉学」19名（47.5%）,「結婚」19名（47.5%）となり，「結婚」の増加が目立った。

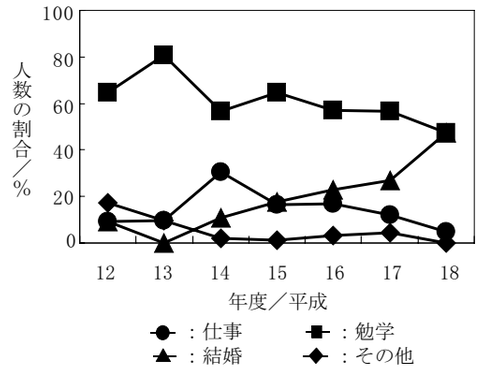

図１．受講外国人の割合の年度別推移(かけはし)

Ⅲ　ソーシャル・サポート・ネットワークの観点から見た日本語支援

１　生涯学習としての日本語ボランティアとボランティア活動の互恵性

筆者らは，次にソーシャル・サポート・ネットワークの観点から外国人受講者を分析した。SSN に関する研究は，元来は，1970年代初頭の米国の健康と環境との関わり合いに関する医療分野での研究に端を発しており，社会心理学的方面で，応用されている[7)]。異文化適応に果たす SSN の役割の重要性を考慮して，日本語教育分野においても，この考えに基づいた分析や研究がすでに報告されている[8)]。筆者らは，ソーシャル・サポート（以下，SS）を，そのタイプと領域の観点から分類する周玉慧[9)]の SS 尺度分類の SS タイプの４タイプ，即ち1.物質，2.心理，3.指導，4.情報について，先に３分類した外国人受講者の分析を行った。その結果，外国人受講者のニーズは，主に，「心理」,「指導」,「情報」のタイプに分類されると判断された。一方，日本語を指導する側の日本語Ｖは，指導活動を継続する過程において生涯学習者として学び続ける存在である。彼らは，Ｖ日本語教室の場から恩恵を受けていると感じ，それが活動の継続性を維持する要因となっている。このことは，平成14年に松田が行った聞き取り・アンケート調査[5)]の結果と同様であり，日本語Ｖが活動を継続する上で，生涯学習者としての側面が重要であることが再確認される結果であった。また，日本語学習支援活動に互恵性が存在していることに着目して，日本語Ｖの立場に立った SSN の分析も可能であると考えられる。

表２．日本語ボランティアが日本語学習支援活動から受ける恩恵の分類

日本語学習支援活動で得られる恩恵の例	SS タイプの４分類			
	物質	心理	指導	情報
学習意欲の満足 （日本語指導を目的とした自らの生涯学習）			○	
心理的満足 （外国人から感謝してもらえる）		○		
知識の獲得 （知らない国の話が聞ける）				○
物質的満足 （珍しい料理や食品を食べられる）	○			
主体的な自己表現 （日本の文化を知ってもらえる）		○	○	○

日本語Ｖを生涯学習者として捉え,日本語学習支援活動で得られると考えられる恩恵を松田・山﨑（2005）の分類[10]に従って挙げ，表２に，SS タイプに基づいて分類した。

２　日本語ボランティアの養成及び生涯学習支援　ー（財）松江市国際交流協会ー

（財）松江市国際交流協会は，先述した「松江日本語指導ボランティアかけはし」によるＶ日本語教室「外国人のための松江日本語講座」を通して，地域の外国人に対する日本語学習支援を平成７年から継続的に行っている。このＶ日本語教室で直接日本語指導にあたる日本語Ｖを新規に養成する養成講座と，既に日本語Ｖ活動を行っているＶを対象にした研修セミナーを開講している。今までの開講実績は表３の通りである。養成講座（開講回数６回）と研修セミナー（同８回）のいずれも，受講者のニーズに現場で柔軟に対応し交流できる地域の人材を育成し支援する目的で実施されている。平成12年度以降（平成17年は除く）は，松田が講師を担当している。養成講座修了者は，原則として「日本語指導ボランティア」として登録し，日本語Ｖグループである「松江日本語指導ボランティアかけはし」のメンバーとして（財）松江市国際交流協会が運営するＶ日本語教室「外国人のための松江日本語講座」において，日本語指導のＶ活動を行っている。

表３．（財）松江市国際交流協会主催による養成講座と研修セミナー等

養成講座と研修セミナーの別	実施時期	受講者数
第１回養成講座	平成７年４月～７月	35
第２回養成講座	平成８年４月～７月	42
第１回研修セミナー	平成８年９月～12月	41
第３回養成講座	平成９年４月～７月	37
第４回養成講座	平成12年１月～３月	30
第２回研修セミナー	平成12年10月	30
第３回研修セミナー	平成13年10月	18
第５回養成講座	平成14年６月～８月	40
第４回研修セミナー	平成14年９月～10月	15
第５回研修セミナー	平成15年10月～11月	36
第６回研修セミナー	平成16年９月～10月	32
第７回研修セミナー	平成17年10月	12
第６回養成講座	平成18年７月～９月	26
第８回研修セミナー	平成18年10月	6
養成講座修了者のための，活動直前実践対策講座	平成18年10月	21

以上の講座は，松江地域の善意の人材を在住外国人の日本語学習支援を担う有意なサポーターとして育成する一方で，彼らの生涯学習の支援も同時に行っており，その適切なバランスがＶ日本語教室の継続的実施の原動力となっている。

３　ソーシャル・サポート・ネットワークにおける大学教員の役割

生涯学習者としての日本語Ｖを支援すると共に，大学との情報共有，連携を目的として，筆者らは公開講座「松江地域における国際交流の現状と未来」を平成17年度に開講した[4]。公開講座の企画実施は，山本が中心となって行った。平日の午後６時から２時間，全７回，受講者として主に日本語Ｖの方々に代表される国際交流に関心のある生涯学習者を想定した。この公開講座では，まず，松江地域における国際交流の取り組みの現状を知ることから始め，その活動の意義を再認識することを通して松江地域の国際交流の未来を展望した。その後，個々の受講者が具体的に行動をおこせるように，動機づけの機会設定と情報提供が出来るよう配慮して構成した。講師は，本学教員を中心として，日本語教育の専門家，理系研究者，心理学研究者，松江地域文化研究者，外国語教員，外国人の国際交流員，（財）松江市国際交流協会職員であった。筆者らも，本公開講座に講師として参加した。講座の各回の後には，意見交換等が自発的に活発に行われたことから，受講者の方々にとって具体的な国際交流活動への取り組みへと繋がるような気づきと学びの場となったことが窺われた。公開講座の前には，受講者を対象としたアンケートを実施して，公開講座受講者のニーズとレディネスに関する情報を把握するように努めた。また，公開講座修了時の感想等も集約し，大学と松江地域の日本語Ｖの連携に資する情報を得る機会を作った。４つの SS タイプの観点から見ると日本語Ｖが大学の公開講座から得られる SS は，主に「情報」と「指導」となるであろう。

この公開講座を通して，大学が松江地域の日本語Ｖから期待されている最も大きな役割としてクローズアップされたことは，リソースの提供であった。リソースには，建物・教室・図書館・教材などのハード面と，教員・職員などの人的リソース面，留学生情報・教育機関のネットワークなどの大学組織が持っている様々な情報リソース等が挙げられる。また更に，松下（1999）[11]による SSN に関する研究や，文化庁による『地域日本語学習支援の充実』[12]において言及されているように，調査研究開発機能の活用も忘れてはならない。表４は，松下（1999）の分類に従って，先の SS タイプの観点から，大学の果たす役割を組織レベルと教員個人レベルでおおまかに分類して作成した。

上記の分類には，「外国人留学生受け入れの拡充」のように分類の困難なものも含まれているが，大学教員が地域と連携して SSN において果たし得る役割の中で，「地域事情に密着した日本語教材の開発」が重要な活動であることが，この表から浮き彫りになってくる。

表４．SSN において大学が果たし得る役割

大学が果たし得る役割の例		SS タイプの４分類			
		物質	心理	指導	情報
組織レベル	掲示板の提供など				○
	教材資料などの貸し出し	○			○
	母語保障講座の実施		○	○	
	公開講座（日本語Ｖ研修）			○	○
	公開講座（無料日本語授業）		○	○	○
	日本語教育実習の地域での実施			○	○
	インターネットなどの利用				○
	大学リソース公開のためのセンター造り				○
	外国人留学生受け入れの拡充	－	－	－	－
教員個人レベル	Ｖの一員としての活動			○	
	調査研究成果の公刊など				○
	ネットワーク作りの仲介（産官学連携）				○
	ネットワーク作りの仲介（学生と地域）			○	○
	国際理解教育との連携			○	
	研修などの講師の担当			○	○
	日本語授業の公開			○	
	地域事情に密着した日本語教材の開発	○	○	○	○

Ⅳ　地域教材開発

１　地域教材開発の必要性と刊行に至る経緯

筆者らは現在，地域に密着した情報を盛り込んだ読み教材，『松江地域事情小冊子（仮題）』の平成18年度末の刊行を目指している。この地域教材は，松田が講師を担当している（財）松江市国際交流協会主催の日本語Ｖ養成講座と研修セミナーの受講者を中心として準備している。

この地域教材開発の発端は，日本語Ｖと活動を共にする中で多くの日本語Ｖの方々から，次のような声を聞き必要性を感じる機会に接したことに始まる。それらは，「島大の学生さんを大茶会に誘う時，どう説明したらいいのかすぐに適切な日本語が出てこなくて往生した」「出雲弁をどのように教えたらいいのか分からない」という地域で日本語指導をしているＶならではの声であり，また，「自分達のＶグループならではのカラーが欲しい」「活動の蓄積を成果として形にしたい」など，Ｖ活動を継続させるために不可欠な成果の蓄積を求める声であった。それらに応えるために，松田は，「かけはし」の研修セミナーの時間等を利用して平成12年から，日本語Ｖ有志による地域教材開発の取り組みを実践してきた。平成14年には，地域密着型の読み教材の発行趣旨説明を松江市国際交流室（当時）と（財）松江市国際交流協会に行い協力を仰いで来た。

以上のように『松江地域事情小冊子（仮題）』の開発の基盤を育む中で，平成17年の島根大学公開講座「松江地域における国際交流の現状と未来」が開講された。その折に，受講者から，地域事情を外国人と共有するための印刷物，具体的には，日本語を学習中のホームステイに来た客人や，新しい隣人となる外国人と共に読んで話すことのできる，平易な日本語で書かれた

文を求める声が聞かれ，地域教材の必要性を再認識した。それと共に，これらの要請に応えるためには，地域で共に活動している大学教員が専門家の立場から積極的かつ計画的に地域事情に密着した日本語教材の開発に関わることが必要であることを感じた。「かけはし」の日本語Ｖと平成18年の「かけはし」養成講座修了者からの多くの関心が寄せられ，執筆のボランティアの申し出があったことや，「かけはし」日本語教室受講者，（財）松江市国際交流協会などの多くの協力を得ることによって，この度，長期的な計画を改めて具体的に立案し，刊行に向けて実践している次第である。

２　地域教材開発の実際

新しい地域教材の開発は，松田が代表を務める『松江地域事情小冊子（仮題）』企画編集委員会を組織して行っている。平成19年１月現在，企画編集委員会は，９名の企画編集委員から成り，これまでに平成18年12月16日と平成19年１月６日，１月15日の３回開かれ，松田が監修して教材の編集方針を決定した。編集方針に従って執筆を担当するボランティアの執筆協力者が，28名おり，執筆にあたっての勉強会を予定している。

【発行趣旨説明】

2002年10月20日

松田　みゆき

本冊子は，松江に居住・滞在する方々が，より質の高い居住・滞在生活を送れるように，文化的な地域事情を提供することを目的としている。松江の観光スポットや，居住・滞在する際に必要不可欠な生活情報を紹介することのみを目的とするものではない。以下に詳しく説明する。

観光客として松江を訪れる人々は，松江の情報を得るために観光ガイドブックなどを携行して来ることが多い。また，松江市観光協会は，大変魅力的な観光パンフレット（含外国語版）を制作し，駅前のインフォメーションセンターなどに配置している。これらの情報は，主に松江の観光資源を紹介することに力点が置かれている。

一方，新しく松江市に住民票を移して転入してきた市民には，どのような情報が提供されているのだろうか。まず，住むためのいわゆる指南書として松江市発行の「便利帳」が配布される。ここには，トラブルなく生活するために必要な情報はほとんど載っている。しまね国際センターからも各国語版の生活ガイドブックが発行されている。

しかしながら，松江の文化的な情報は，地元の情報誌，新聞の県版，そして観光ガイドブック，その他書籍など，ほとんど自助努力と興味によって得ているのが実情ではないだろうか。地域（行政）から，新たに松江市民になる人に対して「これから，松江に住むのだ！」という期待と興味を喚起させるハンディな読み物の提供は今までほとんどなかったと言えないだろうか。

日本人は，言葉のハンディが少なく，また常識として松江の文化事情にある程度は通じているため，それらの情報の提供について，行政などに対して強い要望が出されることはなかったと考えられる。個人的なことではあるが，３年前に来松した松田自身を振り返ってみると，も

しも予め知っていたら地元の方ともっと早く打ち解けることができたのに・・・と感じる文化的な地域事情も少なくない。長年，松江地域に住んでいる方とお話をする際に，「地元の方にとって自明のことが分からないため」に交流がスムースに行かなかいことも多かった。「地元の方にとって自明のこと」が，実は松江地域の特殊事情であることもしばしばである。しかし，長年松江に居住している人にとっては，あまりにも「自明のこと」であるために，外部からの来訪者や新市民にとって「何が分からないのかが分からない」という事態が発生しがちなのである。後で分かって大笑い！などということもある。・・・日本人同士にとっても，このような異文化接触場面における多少の摩擦は生じる。

ましてや，外国から新しく「お隣さん」として，来日した方々には，いわゆる「便利帳」のみでなく，より良く地域に参加して「住む／滞在する」という視点から松江市の文化的な地域事情への興味を広く喚起させるような読み物の提供が求められているのではないだろうか。このことは，日々実際に接する外国人居住者やその周辺の市民の方々から強く感じさせられている。

この冊子は，読後に「こんな街に住むことになるのかぁ。楽しみだなぁ」という感想と共に「休みの日には，松江で何をしようか」と具体的にイメージできるもの，「松江の話題を地域の方々と直接，話してみたい」と感じさせるような話題を提供するものを目指したいと考えている。

先に異文化接触場面を取り上げて「摩擦」と述べたが，異文化接触場面は，新しい出会いと交流の場であることに注目したいと考える。本冊子を仲立ちとして，交流が促進されることを目標としたい。

４ヶ国語による出版を予定しているため，国籍を問わず，読み物としても楽しんでもらえるのではないだろうか。松江市民および，訪問滞在する外国人とそのホストファミリーなどにも適した読み物を目指したい。

―中略―

松江市では，在住外国人のみならず，姉妹都市交流や夏の韓国人青年の交流などで，訪問滞在する外国人が急増している。この方たちが，将来帰国した後に，本国で松江の事を語ってくれる民間の大使となることを考慮すると，松江滞在中に，多くの松江市民との積極的な交流を通じて，充実した時間を享受していただくことの重要さは言うまでもない。

以上のことから，「松江市に住むこと（／滞在すること）に期待と興味を喚起させるハンディな地域文化事情読み物」が必要であると考え，企画するに至ったのである。

以上，抜粋終わり

上記の趣旨に沿って，新しい冊子を開発するに当たり，企画編集委員会で，編集方針を以下のように考えて決定した。

（１）編集方針の決定方法

新しい地域教材開発の編集方針を決定するにあたって企画編集委員会では，これまでに日本語学習支援活動や国際交流活動の成果として公刊されている出版物の例を，以下の４タイプに分類してみた。そして，本企画の発行趣旨に叶い，必要度の高い順に優先順位をつけ，段階的

に新しい冊子の執筆を進めることとした。

［A］生活情報に関する冊子：

例）『徳島生活ガイドブック　Welcome to Tokushima』国際交流懇話会 HIROBA 発行

［B］生活や交流に必要な地域事情及び日本語を学習するための基礎的教材：

例）『話そう考えよう　初級日本事情』福岡日本語センター／『かけはし―生活・交流・学習のための素材―』前橋市国際交流協会発行／『日本語ビデオ教材「石川で学ぶ」』石川県国際交流協会／『にほんごまるかじり～しまねで学ぶ日本語～』しまね国際センター

［C］地域の文化的な事情に特化して扱っている冊子：

例）『山陰へきなんせ』鳥取大学留学生課／『「えひめ」をよもう』松山東雲女子大学人文学部国際文化学科向井ゼミ

［D］地域語を学習するための冊子：

例）『高知の生活語2002』今井多衣子他／『広島方言教材解説文』広島国際協力センター

これらの４分類のうち，［A］の「生活情報に関する冊子」には，日本語学習指導の視点はなく，生活情報中心のいわゆる「便利帳」である。『徳島生活ガイドブック　Welcome to Tokushima』は，徳島の日本語Ｖの方々が中心となって制作されたが，同様の趣旨の冊子は，松江地域では，行政によって，既に多言語で発行されている。また，多文化共生ネットワークが，独自に医療関係用語の勉強会を通して新たな取り組みをしている。これらの点を考慮すると，我々の手掛ける新しい冊子に主に期待される役割ではないと判断される。

［B］の「生活や交流に必要な地域事情及び日本語を学習するための基礎的教材」の例のうち，『話そう考えよう　初級日本事情』は，（財）松江市国際交流協会主催による「かけはし」研修セミナーで，以前取り上げた。研修セミナーでは，地名や写真などの地域情報の差し替えや一部改変を行うことで，実際のＶ日本語教室でも活用可能な松江市向けの教材ができた。『日本語ビデオ教材「石川で学ぶ」』のようなビデオ教材は潤沢な予算を要するのですぐには実現困難である。また，しまね国際センターによる『にほんごまるかじり～しまねで学ぶ日本語～』は，研修生対象として制作された文法シラバスの教材であり我々の冊子が想定する内容，読者層とはやや異なる。これらの教材は，一般的な日本の生活事情と地域の特殊生活事情を扱っており，一般的な部分は，そのまま使用することが出来ること，また，地域の特殊事情に係る部分は，松江に合わせて改変使用することによって，教室のニーズに充分に対応して来ていること等を考慮すると，［B］もまた我々の目指す新しい冊子の主な目的になりにくいと判断される。

［C］の「地域の文化的な事情に特化して扱っている冊子」は，地域に密着した地理，産業，名所旧跡，逸話，特産品，行事，地域語，地域性などの地域文化を扱っている。この例に該当する冊子は，松江地域には，まだ十分でないようである。

［D］の「地域語を学習するための冊子」は，会話文を挙げて地域語を紹介する教材である。詳しい文法解説も付してある。この例に該当する日本語教育教材も，松江地域にはまだ十分に備わっていない。ただし，［D］で扱う学習目標言語としての地域語は,[C]で扱う文化の一部として取り上げることもできるので，［C］の内容の一部として，コラム的に地域語に関する情報を扱うことも可能である。

以上のように考えると，新しい冊子が先ず目指すべきは，上記分類のうち，［C］であり，段

階的に計画的して制作を始め，将来的には，［D］を扱うことも視野に入れておけばいいと判断される。従って，我々は新しい教材冊子を「地域の文化的な事情中心」の読み教材として開発することにした。内容には，松江の地域事情及び地域語を含み，日本語Ｖの日本語学習支援活動での使用のみならず，松江滞在・在住の外国人と彼らを取り巻く全ての住民を読者として想定する。例えば，Ｖホストファミリーへの話題提供などにも役立つ内容を期し，松江地域の国際交流プログラム等にも資することを目指すこととした。

まず，松江地域事情を端的に紹介できるように考慮して，企画編集委員会で精選した「項目」毎の説明文の執筆から着手する。本冊子の名称は，執筆協力者に公募の後，企画編集委員会で決定する予定である。

（２）発行趣旨とその背景の確認

企画編集委員会で確認された「発行趣旨とその背景」は以下の通りである。

本冊子は，松江に居住・滞在する方々が，より質の高い居住・滞在生活を送れるように，文化的な地域事情を提供することを目的としている。松江の観光スポットや，生活情報を紹介することのみを目的とするものではない。

観光客として松江を訪れる人々は，松江の情報を得るために観光ガイドブックなどを携行して来ることが多い。また，松江市観光協会等は，外国語版を含む大変魅力的な観光パンフレットを制作し，駅前のインフォメーションセンターなどに配置している。これらの情報は，主に松江の観光資源を紹介することに力点が置かれている。

一方，新しく松江市に住民票を移して転入してきた市民に提供される情報を考えると，まず，住むためのいわゆる指南書として松江市発行の「便利帳」の配布が挙げられる。「便利帳」には，トラブルなく生活するために必要な情報はほとんど載っており，各国語版もある。

しかしながら，松江の文化的な情報は，個人の努力と出会いによって得ているのが実情であり，新たに松江市民になる人に対して「これから，松江に住むのだ！」という期待と興味を喚起させるハンディな読み物が積極的に提供されることはほとんどない。

日本人は，言葉のハンディが少なく，また既に持っている日本文化に加え，常識として松江の文化事情にある程度は通じているため，それらの情報の提供について強い要望が出されることはない。しかし，松江地域外から来松した日本人の方々の口から，もしも予め知っていたら地元の方ともっと早く打ち解けることができたのに・・・と感じる文化的な地域事情も少なくなかったという声が聞かれることも事実である。長年，松江地域に住んでいる方との交流において，「地元の方にとって自明のことが分からないため」に相互理解がスムースに行かなかいことも多いようである。「地元の方にとって自明のこと」が，実は松江地域の特殊事情であることもしばしばである。しかし，長年松江に居住している人にとっては，あまりにも「自明のこと」であるために，外部からの来訪者や新市民にとって「何が分からないのかが分からない」という事態が発生しがちなのである。日本人同士にとっても，このような異文化接触場面における多少の摩擦は生じる。

ましてや，外国から新しい隣人となるべく来日した方々には，いわゆる「便利帳」のみで

なく，より密着して地域に住み参加するという視点から松江の文化的な地域事情への興味を広く喚起させるような読み物の提供が求められていると考えられる。

この冊子は，読後に「こんな街に住むことになるのかぁ。楽しみだなぁ」という感想と共に「休みの日には，松江で何をしようか」と具体的にイメージできるもの，「松江の話題を地域の方々と直接，話してみたい」と感じさせるような話題を提供するものを目指す。

異文化接触場面は，摩擦であると同時に新しい出会いと交流の場であることに注目し，本冊子を仲立ちとして，交流が促進されることを目標としたい。

まず，「かけはし」のＶ日本語教室で有効活用できる平易な日本語による読み教材として着手する。将来的には，多言語によって出版し，国籍を問わず，読み物として楽しめるものに育てたい。そのことによって，国籍を問わずに松江市民および，訪問滞在する外国人とそのホストファミリーなどにも適した読み物を目指したい。

松江では，在住外国人のみならず，姉妹提携都市交流，島根大学の姉妹協定校の交流等で，訪問滞在する外国人が急増している。この方たちが，将来帰国した後に，本国で松江の事を語ってくれる民間の大使となることを考慮すると，松江滞在中に，多くの松江市民との積極的な交流を通じて，充実した時間を享受していただくことの重要さは言うまでもない。

以上のことから，「松江市に住むこと（／滞在すること）に期待と興味を喚起させるハンディな地域文化事情読み物」が必要であると考え，企画するに至ったのである。

以上の発行趣旨は，企画編集委員ひとりひとりが，日々実際に接する外国人居住者や近隣の市民の方々との交流を通じ，松江地域の住民としての視点と，生涯学習者である日本語Ｖの視点の双方の視点によって得られた現状認識の上に立って書かれたものである。企画編集委員会では、発行趣旨とその背景を確認した上で具体的な作業に取り掛かった。

（３）「項目」と執筆要項の決定

発行趣旨と編集方針に従って，松江地域事情を語る上でのキーワード，用語などの執筆「項目」を立てて，紹介文を書く。紹介文は，松江地域外からの客人を迎え入れたホストのつもりで，話題となる項目毎に解説する文である。本小冊子を執筆するのは，プロの作家ではないので，他人に読んでもらえる文を書く訓練が必要である。説明文は，文字数制限等を決めて論理的に書けば，読み手に誤解のない情報を伝えることができ，訓練すれば誰でも書けるので，本小冊子も初めはこれを目指すこととした。松田は，企画編集委員全員にこうした内容を周知し，小冊子の紹介文のレベルを揃えるように努めた。原則として，各項目はＡ４用紙１枚以内（図表イラスト含む）で400～1000文字程度とした。

各項目毎に，その項目で何を述べるのか，冊子全体における執筆内容の役割を明記した「目標規定文」を設定し，編集上のバランスを見てから執筆に取り掛かることにした。執筆者は項目毎に紹介する内容を提示してその定義を述べる。その後，関連情報やエピソードを交え，その項目の情報を，実際に見たり食べたりするなど体験することによって，どんなことが享受できるのかを楽しく伝えられるよう心掛けた。新しい冊子は，Ｖ日本語教室で扱う場合は，読み教材に位置付けられることもあるだろうが，情報や話題の提供を目的としているため，精読用の

教材ではなく，むしろ多読・速読での使用を想定した。そのため，使用する日本語のレベルは日本語多読研究会が定義する「レベル３」[13]に統一し，音声教材も作成することとした。ここで書かれる文章は，松江地域を知る上での基本的な用語事典的な機能も果たすよう考慮し，企画委員が今後の小冊子を制作する上での基盤となる共通認識の確認もできるようにした。そのため，文章を書く際に使用した資料の出典，HP アドレスなどは控えることにした。資料は，次の編集に備えて可能な限り保存し，項目ごとにファイルしておくようにした。

項目別の紹介文の他に，「松江地域事情に欠かせない物語のリライト」や「松江地域語のコラムの執筆」なども予定している。前者としては，小泉八雲の作品や出雲神話を念頭に置いている。後者としては，島根大学留学生を対象とした「出雲弁アンケート」調査の結果や島根大学公開講座講師の方言研究家の意見などから厳選した地域語のコラムを書くことを予定している。コラムには，使用場面の説明，文法説明，文化的説明を含むものとし，内容を表すイラストも可能な限り添える予定である。

平成19年１月現在，以上の企画編集方針に基づき，平成18年度内の出版を目指し，決定した約40項目の内容を分担して執筆している。新しい冊子は，「かけはし」の日本語教室で使用しながら検討し，平成19年度中には改訂版を作成する予定である。最終的には，外国語版や，同内容で異なった日本語レベルの項目，地域語学習のための教材の執筆も検討している。

Ⅴ　おわりに

生涯学習者としての日本語Ｖに対して大学が果たし得る役割を SS タイプの観点からの考察を中心として俯瞰的な研究を行ってきた。この研究過程を通じて，筆者らは地域の多くの方々と直接話し合うことができ，その結果，考察の機会を与えられ，SS タイプでいう「心理」「情報」「指導」面で多くの支援を得た。今後も SSN の観点からの観察の継続を続け，松江在住外国人の数や身分割合の変化等に応じて予想される日本語支援の仕組みや SS の変化の要求に対応するべく備えたい。その際，さらに，第２章の表５の分類に代表されるような SSN における大学の役割が重要になってくることが予想される。地域のＶ日本語教室における日本語Ｖの活動を，様々な機会を利用して紹介するために調査研究を続け成果の公刊を心掛けるとともに，地域で日本語学習支援を行う方々への公開講座の企画やネットワーク作りの仲介など引き続き積極的に取り組み交流を深めたい。

現在着手している『松江地域事情小冊子（仮題）』を，できるだけ早期に刊行できるように，今後とも地域に密着した生涯学習支援活動を行ってゆきたいと考えている。この冊子の制作に関わっているＶは，企画編集執筆などの作業の過程で，自らの文化を改めて問い直す機会を得たという感想を口々に述べている。これらの知的作業をグループで進めることを通して，多様な文化が共存し活動しているＶ日本語教室での交流のあり方や，地域社会の文化についての内省が自然に促されているようである。また，日本語Ｖが日本語学習者に発話する際の日本語のコントロールも併せて促進され，学習の機会が生みだされていることを実感している。また，執筆，編集作業は，地域事情や文化をどのように捉えるかという認識の共有や，その的確な紹介方法を考えるといった課題に常に取り組む知的活動である。これらの活動は，島根大学の教員を含む松江在住の市民が共に考え，実際に執筆や交流活動に取り組むことに意義があると考

え，これらの学習の機会を提供する目的で筆者らが企画した平成19年の島根大学公開講座の開講を許可していただいた。講座名は，「松江地域文化を語る－松江地域事情日本語教材の開発－」である。筆者らが企画し，冊子の企画編集委員の方々にもお手伝いを頂くことになっている。対象は，広く松江市民の方々である。初めに，松江在住の外国人事情等を概説し，松江の地域文化，地域事情に密着した簡便な日本語教材開発を行うことにより，松江地域の留学生等を対象とした日本語指導の知識・技能を修得させることを目的としている。この公開講座は，現在刊行準備中の冊子を元に実施する。冊子の更なる充実と冊子を利用した交流活動の拡大の機会となると考えている。

今後も，これらの様々な交流活動を通じて，日本語Ｖと地域行政，大学などの連携が促進され，SSN が拡がってゆくことを筆者らは期待している。

謝辞：
「松江日本語指導ボランティアかけはし」のメンバーの方々，特に渡部律也会長と西尾智子氏には大変お世話になりました。また，（財）松江市国際交流協会には，『松江地域事情小冊子（仮題）』作成に係る幅広い援助をいただきました。ここに深く感謝申し上げます。

また，本研究を行うきっかけとなる出会いと機会を与えてくださったボランティア日本語教室のみなさまをはじめ，本学公開講座で貴重な御意見をお聞かせくださいました受講者のみなさまと講師の先生方，そして資料作成等でお世話になりましたすべての方々に御礼申し上げます。

参考文献

１）『島根県の国際化の現状』島根県環境生活部文化国際課　2006年３月
２）『島根県在住外国人実態調査報告書』島根県総務部国際課　2001年３月
３）『国立大学法人島根大学概要2006』島根大学広報・公聴委員会（総務部総務課）データブック，p.26.
４）山本達之・松田みゆき（2006）「松江地域における国際交流の現状と未来―平成17年度公開講座報告―」『島根大学生涯学習教育研究センター研究紀要』第４号，pp.11－21.
５）松田みゆき（2002）「島根大学留学生の日本語教育の現状と課題―日本語ボランティアグループと島根大学の連携の必要性について―」『島根大学生涯学習教育研究センター研究紀要』第１号，pp.15－33.
６）松田みゆき・山本達之（2006）「松江地域日本語ボランティアの生涯学習者としての活動に関する考察―ソーシャル・サポート・ネットワークにおける大学の役割―」『日本語教育学会中国地区研究集会予稿集』，pp.11－18.
７）浦光博（1992）『支えあう人と人―ソーシャル・サポートの社会心理学―』サイエンス社など
８）田中共子（2000）『留学生のソーシャル・ネットワークとソーシャル・スキル』ナカニシヤ出版など
９）周玉慧（1993）「在日中国系留学生用ソーシャル・サポート尺度作成の試み」『社会心理学

研究』第 8 巻，第 3 号，pp.235－245.
10）松田みゆき・山﨑佳子（2005）「「交流クラス」における参加者のインタレスト充足に注目した協働の可能性―東京大学大学院工学系研究科日本語教室「交流クラス」の実践報告―」『2005年度日本語教育実践研究フォーラム予稿集』，pp.91－94.
11）松下達彦（1999）「外国人のためのソーシャル・サポート・ネットワークにおける大学教職員・大学の位置づけ―日本語学習支援などの具体的支援策―」『国際学レヴュー』第11号，pp.25－47.
12）文化庁（2004）『地域日本語学習支援の充実―共に育む地域社会の構築へ向けて―』文化庁編
13）NPO 法人日本語多読研究会（2006）『レベル別日本語多読ライブラリー　にほんごよむよむ文庫』アスク出版